

# グローバル化時代の「闖入者」

内藤 由直

## 一 はじめに

本稿は、安部公房の「闖入者」<sup>(1)</sup>を、グローバル化時代の新たな植民地主義を描き出す小説として再読することで、本作品の表現が持つアクチュアリティを引き出そうと試みるものである。

「闖入者」は、日本がアメリカ軍の支配下に置かれていた戦後占領期に発表された小説であり、深夜に突然闖入してきた家族が強要する民主主義によって破壊していく主人公の姿を描く物語内容から、当時のアメリカ占領軍と日本人との関係をアイロニカルに表現する作品として読み解かれてきた。<sup>(2)</sup>

例えば、山田博光は、駐留するアメリカ軍の評価を巡って国際派と所感派に分裂した日本共産党の五〇年問題に応答する作品として「闖入者」を捉え、「アメリカ占領軍は日本に闖入者としてやってきて、形式的な民主主義で日本人を支配し、日本人の独立を奪う存在だというのが、安部公房の回答である」(安

部公房『社会文学』一九九七年六月)と述べている。同様に田中裕之も、共産党員であった作者の立場を踏まえ、「当時の安部の思想的立場からすれば、この作品が、反体制の側から、植民地化されている日本および日本人の姿を描いたものであるのは明らかである。民主主義を振りかざして「ぼく」の自由を奪う「闖入者たち」はGHQおよびアメリカに対応している」(「比喩と変形」『梅花女子大学文学部紀要』二〇〇三年一月)と指摘している。いずれも、作品発表時の時代状況を背景にして、「闖入者」の寓話が喚起するイメージをコンテクストに即して浮かび上がらせた読解であり、時代と密接に関係しながら存立する本作品の歴史的位相を明示したものであると言える。

しかし、石沢秀二が闖入者家族の形象に看取される「抽象的リアリティ」(「友達」『国文学 解釈と教材の研究』一九七二年九月)の特質を指摘し、「もともと具象的写実性をそなえた物よりも非具象的抽象性をそなえた物のほうが、その物自体から触発さ

れるイメージはより一層、自由に開放される。したがって、「闖入者」のイメージは、プロットに描き出されている「民主主義」とか「隣人愛」とか「ヒューマニズム」とか、現代社会におけるアクチュアルな問題性を越えた「なにかしらこわいもの」の侵略を恐怖のうちに予感することもできる感覚的拡がりをもっている（同前）と述べるように、本作品に備わる高度の抽象性に注目するならば、一九五〇年代当時のアメリカ占領軍と日本人との対立構図に止まらない別様の意味を読み取ることが可能となるはずだ。

ゆえに、本稿では、作品が描き出す闖入者家族と主人公Kとの抗争を、発表当時の時代背景と重ね合わせてアメリカ占領軍と日本人との戦いと読む先行論の枠組みを退けた上で、一度抽象化することを試みる。そして、作品の表現自体から立ち上がるリアリティを現在における我々の現実性として把握することで、先行論が充分に開示できなかった、「闖入者」に備わるグローバル化時代の植民地主義批判の文脈を浮かび上げられる。過去ではなく現時の支配と搾取を象徴的に描出する作品の強度を確認することによって、国境を越えた社会・経済・文化等のネットワークが拡大するグローバル化の渦中にある現在の場が、もはや戦後でもなければ戦前でもなく「戦時下」にあることを示し、「闖入者」という往時の作品を今ここで読むことの意義を鮮明にしたい。

## 二 国民化の陥穽

一九四五年の敗戦後、進駐してきたアメリカ軍は、日本の社会システムを根底から変革させようとした。なかでも、連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）が力を注いだのは、日本の民主化であった。<sup>3</sup> 勝者の軍隊によって日本にもたらされた急激な変化は、「配給された「自由」（河上徹太郎「配給された「自由」『東京新聞』一九四五年一月二六―二七日）」と揶揄されるほど人々に戸惑いを与えたが、敗戦国としては所与のものとして甘受しなければならなかった。ジョン・ダワーが述べるように、「占領期全体とその後においても、敗戦日本にたいするアメリカの一連の改革を、「上からの民主主義革命」を押しつける試みと表現することは、勝者の側でも敗者の側でも、ごく普通であった」（『増補版 敗北を抱きしめて（上）』三浦陽一・高杉忠明訳 岩波書店 二〇〇四年）のである。小説「闖入者」はこの押しつけられた上からの民主主義革命を寓話化した作品である。

「闖入者」の物語は、ある日の深夜、九人の家族が主人公Kのアパートへ忍び寄る足音から始まる。突然押しかけてきた家族は、Kの部屋を自分たちの部屋であると主張し、我が物顔で生活を始める。そのことにKが抗議すると直ぐさま会議が招集され、多数決によって家族の主張が採択される。絶対多数である家族の論理が、民主主義の美名の下に強制されるのだ。

当初、Kは、あくまでも自分の権利を主張し抵抗するが、ファシストと罵られ、屈強な父親と兄弟の力によってねじ伏せられてしまう。会社へ通う定期券と壊れたシャープ・ペンシル、そして手帳以外の全てを奪われたKは、それでも抵抗することを考え、アパートの管理人や住人たちとともに家族を追い出そうとするが上手くいかない。警察への訴えもまた、民事不介入を盾にして相手にされなかった。Kは恋人のS子に給料袋を預けたり、闖入者家族の長女キク子を味方につけようとしたり、弁護士に助けを求めるなど様々な画策や抵抗を試みるが、全て徒労に終わってしまう。闖入者家族に仕える奴隷として屈辱の日々を過ごしながら、Kは最後の抵抗として秘密裏にピラを作成し、アパート住人に団結を呼びかけようとする。だが、その計画も家族に露見し阻止されてしまい、終にKは追いやられた屋根裏で首を吊って息絶えてしまうのである。

このような「闖入者」の物語内容は、当時の読者に眼前の現実を想起させ、日本が外国軍隊による占領下にあるという事実を突きつけるものであった。例を挙げれば、黒井千次は本作品の発表時を振り返り、「当時は政治の季節であり、対日講和条約、日米安全保障条約が調印される時期であり、火炎ビン闘争が盛んな頃でもあった。そんな時代の風に捲き込まれるようにして読んだ「闖入者」は、占領軍（進駐軍）とか支配者とかいうイメージを若い頭脳の内にストレートに喚起した」（『夜と風』『新潮』一九九三年四月）と述べている。黒井はまた、闖入者家族がK

のアパートへ押しつけてきた理由が作品内で明示されていないことについて、「時代の状況からして、民主主義をスローガンに有無を言わず暮しの中に押し入って来る者の姿は誰の眼にも見えていたので、説明する必要がなかったのだろう」（同前）とも述べている。当時、この作品を読んだ者は、闖入者家族の形象にアメリカ占領軍が、破滅に追い込まれる主人公Kの姿に読者である自分たち自身が重ね合わされていることを、自明のものとして受け取ったのである。

こうした同時代状況をより鮮明にするために、呉美姪は、一九五〇年代前半に議論されていた国民文学論争を新たな分析軸として導入し、さらに精緻な読解を試みている（呉美姪『安部公房の〈戦後〉クレイン 二〇〇九年』。戦後国民文学論争は、竹内好による「今日、私たちは国民文学への念願を捨てては行かない」（『近代主義と民族の問題』『文学』一九五一年九月）という揚言から始まった日本近代文学史上最大の論争である。国民文学論争における竹内の問題提起は、「日本が今日、独立を失っている、他国の隷属下におかれている」（『文学における独立とはなにか』『岩波講座文学第三巻』岩波書店 一九五四年）という現状を打ち破ろうとするものであった。その問題意識は野間宏によって「アメリカ軍から日本民族を解放するたまたかいである」（『国民文学について』『人民文学』一九五二年九月）とさらに明確に具体化され、国民文学はアメリカ軍に対する「レジスタンス文学抵抗文学」（同前）と概念化された。呉によれば、「闖入者」

と国民文学論争は、「アメリカという他者とそれに対抗する日本国民という主体の問題」(『安部公房の(戦後)』前掲)を共有しているという。その上で呉は、同時代の国民文学論が国民の観念を实体化し、同質的な国民共同体を議論の前提としていることに対して、「闖入者」およびその作者は「同質の共同体を想定するのではなく、むしろその亀裂を露呈し、その中に真の国民的主体を見出そうとするスタンス」(同前)であったと指摘する。国民文学論争の渦中に露頭することとなった、複雑多様に存在する国民主体をいかにして具体的に把握するのかという課題を「闖入者」は先取りしており、作品には「ありうべき(主体)」としての国民が不在であることへの焦り(同前)が反映されている、というのが呉の考えである。小説のラストシーンで描かれる「Kの死は、個人を超える国民や民族という集団的な主体が、いまだに成熟していないという状況を暗喩している」(同前)という呉の評価は、アメリカ軍への抵抗という目的を完遂できず、最終的に失敗に終わった国民文学論争の結末を予見する批判的言明としても捉えることができるだろう。

だが、呉を始め前節でも言及したような先行研究が把握する「日本人」あるいは「日本国民」とは、一体誰のことを指し示すのであろうか。周知のように、「闖入者」が発表された一九五一年の段階において、未だ植民地の領有権を法的に放棄していなかった日本は、様々な人種・民族が混在する国家であった。小熊英二が『日本人』の境界』(新曜社 一九九八年)で詳

述するように、当時、日本国籍を所持する日本国民には多様な人種・民族が包含されており、日本人ではない日本国民が多数存在していたのである。ゆえに、人種や民族といった種的同一性に基づく特定の国民主体を見出すことなどそもそも不可能だったのであり、「日本人」と「日本国民」とを単純に同一の集団として重ね合わせることはできないのである。

「闖入者」を読み直す過程において、アメリカ占領軍への抵抗主体として浮かび上がってくる存在を、もしも人種としての「日本人」として把握するならば、それは非日本人を疎外した排外主義的な主体となるであろう。逆に、国籍に基づいた「日本国民」として捉えるならば、それは雑多な人種・民族を内に孕んだ分裂した主体となり、そこに統一的なアイデンティティを見出すことはできない。いずれにしても、アメリカ軍の占領下で抑圧・支配されている主体を、特定の共同体として一律に把握することは困難であるのだ。

「闖入者」で破壊に追い込まれるKの姿に特定の民族・国民主体の姿を捉えるこれまでの読解は、現在の「日本人」や「日本国民」の観念を過去に投影しているに過ぎない。それらは、五〇年代前半の文学的・政治的実践の中で歴史的に形成されたものなのである。

例えば、五一年から五五年まで盛んに議論された戦後国民文学論争は、その論理の核心に、他者を排除し自民族中心主義へ閉塞していく機制を備えるものであった。等しくアメリカ軍の

隷属下にある多様な人種・民族の中から非日本人を選択的に排除し、日本人のみを国民として特権化する議論を展開していたのである。<sup>4)</sup> 同様の作為は政治の領域でも行われており、内地戸籍を持たずに在住していた在日朝鮮・台湾人は「五二年にサンフランシスコ講和条約が発効したあと、日本国籍が無条件に一斉剥奪」（小熊英二『日本人』の境界）前掲）され、非日本人として日本国民から排除された。また、武装闘争方針を掲げアメリカ軍に抵抗していた日本共産党は、五五年七月の第六回全国協議会において、五〇年代前半の活動を自己批判した上で、「武装闘争」方針を放棄、それと同時に在日朝鮮人との組織的・二重性を解消して「日本人」のみの党になる」（道場親信『占領と平和』青土社 二〇〇五年）。共闘していた在日朝鮮統一民主戦線との関係を清算し、日本人でない者を革命の主体から排除していったのである。

つまり、五〇年代前半に文学と政治の双方の領域で企てられたのは、「非日本人」を疎外し、民族や国籍に基づいた「純粋日本人」のみの主体あるいは共同性を想像的に構築することであったのだ。そうした文学的・政治的实践は、丸山真男の言う「第三の「開国」（「開国」『講座現代倫理第十一巻』筑摩書房 一九五九年）の後に繰り返された、国民化の過程とも捉えることができるのである。

こうした五〇年代前半における国民化の歴史を等閑に付したまま、「闖入者」に描き出される抵抗主体を「日本人」や「日

本国民」と把握することは、あたかも現在において観念されるそれらのみがアメリカ軍からの抑圧・支配を受けていたという誤った読みを導き出すことになるはずだ。

それでは、他者が排除されていた歴史的過程を本作品の解釈に組み込めばよいのか、と言えば簡単にそうとは言いが切れない。なぜなら、作品発表時の歴史性に固執することで、「闖入者」が喚起する問いの拡がりを制限し、本作品が持つ時間や空間を越えた普遍性を蔑ろにしてしまう恐れがあるからである。次節で見るように、「闖入者」は、歴史や場所を超越して、それぞれの読者がいる現場で読まれ、意味を生成する作品であるのだ。

### 三 占領と搾取の普遍性

「闖入者」は、突然やってきた九人家族と平凡な一人の男 K との間で展開される抗争の物語である。この物語は、必ずしも作品が発表された一九五〇年代当時の歴史的文脈と対応させて読まなければならないということはない。本作品を読む者は、各々が今、存在する場において、それぞれが直面する問題を描き出す小説として、これを解釈することができるのである。

一例を挙げると、「闖入者」をチェコ語に翻訳した<sup>5)</sup>V・ウインケルヘフェロバーは、本作品を読む度に「ミュンヘン協定と私の国のヒトラーによる占領からはじまりベトナムにいたる、個人的なユーモラスな体験やら、けっしてユーモラスとは

思えない体験など、矛盾だらけの連想にとらわれてしまう」「(作家と作品 安部公房)『日本文学全集85 安部公房集』栗栖継訳 集英社(一九七二年)と述べ、一九三八年のナチスによるチェコスロバキア侵攻や、フランス・アメリカによるベトナムへの介入を想起している。あるいは、栗栖継は、ウインケル・ヘフェロバーによつて訳された「闖入者」を読んだチェコスロヴァキアの読者たちは、三十年以上前のミュンヘン協定やナチス・ドイツによる侵略と占領や、遠いベトナムの状況よりも、長いあいだ最大で最上の友人と信じこませられてきたソ連による侵略と占領という、身近かでないままましい現実を連想したにちがいない」(安部公房と翻訳の問題『ユリイカ』一九七六年三月)と、本作品が六八年のプラハの春を思い起こさせたはずだと述べている。<sup>6)</sup>このように、「闖入者」の物語は、歴史や場所を越えた普遍性を持つものなのであり、読む者の想像力によつて、読者が今、生きている渦中にある種々の抗争現場を喚起する抽象性を備えているのである。

では、本作品のどのような表現が、時間や空間を飛び越える多彩な読みを喚起するのであるのか。

物語の中で最も目を惹くのは、正義を掲げて闖入してくる家族たちの振る舞いである。彼らは深夜、Kの住むアパートを指して押しかけてきた。許可を得ることなく部屋に入り込んだ家族たちに対してKは「何をしに来たんです？」と問うが、家長である紳士は「自分の家に来たのに、何をしに来たと

は、どういう意味かね。君は、おかしな口のききかたをする」と、Kの部屋が自分たちの居場所であると主張する。猛烈に抗議するKに対して、家族は会議を開き多数決によつてここが自分たちの家であることを決定するが、この決定の正当性は単数的優位によつて保障されているわけではない。彼らの正当性を担保しているのは、Kの力を凌駕する物理的な暴力なのである。闖入者を追い出そうとするKに対して家族たちは次のように述べ、Kを「正義の力」によつて抑え込む。

「こいつは、自分に都合が悪くなると、多数の声を踏みにじつて、暴力に訴えようとするんだ。この老婆を、この可憐な子供たちを、この夜空に追出そうという、悪魔のような奴。私たちの自由を守るために、私たちの取るべき手段は……」すると紳士の長男がその後をつづけて言いました。「ヒューマンイズムの陣営を武装することだ。」つづけて次男が、「暴力には正義の力をもつて闘わなければならぬ。」

Kは抵抗する度に紳士と長男・次男の三人に殴られ、羽交い締めにされ、彼らの言う正義の力によつて従順を強いられるのだが、正当性の根拠がそうした圧倒的な暴力に支えられている以上、多数決は単なる形式的な手続き以上の意味を持ち得ない。たとえKに家族があり、闖入者たちより数的優位に立つ

たとしても、対抗する力が弱ければ、闖入者家族はヒューマニズムの名の下に少数の権利を主張し、暴力によってそれを押し通すことができるだろう。彼らは、ベンヤミンの言う「法措定の暴力と法維持的暴力」（『暴力批判論』ヴァルター・ベンヤミン著作集<sup>1</sup>）野村修訳 晶文社 一九六九年）の双方を兼ね備えた存在なのであり、合法的な権力をも合法化して他者を支配することができる。闖入者家族は、他者の領域へ侵攻し、占領する威力そのものの表象なのである。

ところで、闖入者たちはどのような目的を持ってKの部屋にやってきたのだろうか。家族たちによる突然の闖入の後、殴られ気を失ったKが翌朝、目を覚まして気付いたことは、「第一に財布がなくなつて」いたことだった。闖入者たちは、場の占領とともに、Kの金を目当てとしていたのだ。彼らはすぐにKの「貧弱な財布で道具をそろえ、もう一銭も残っていない始末」となり、Kが会社から持ち帰る給料で生活を維持しようとする。Kの給料日は既に家族たちに把握されており、帰宅するなり「K君、月給袋を出したまえ。」と、全ての金銭を差し出すことを要求されるのである。Kは恋人のS子に給料袋を預け、闖入者たちには渡すまいとするが、結局は奪い取られてしまう。闖入者たちに部屋を占拠された上に、Kは搾取される立場に追い込まれてしまうのである。Kが最後の抵抗として準備したアパート住民へ団結を呼びかけるピラには、次のように書かれていた。

私は不当にも未知なる一族によって、突如住居を奪われ、全生活を支配されるに至つた。私は一切の自由を失い、餓死寸前にある。しかも私は労働によって彼らを養わなければならぬのだ。こうした不当なことを、彼らは多数決という美名にかくれ、家族の人数をたのみに、合法的に押しつけてくる。諸君、こうした非合理が許されるとしたら、社会は破滅以外にたどる道がないではないか！

自己の労働によって、自らを支配する他者を養わなければならないという搾取の構造は、Kの生活のみに降りかかった特殊な災難ではない。右記の引用文に続けてKは「私一個の問題ではない。明日に待ち受けている諸君の運命である」と記しているが、作品の中では長女キク子の口から、これまでもKと同様、搾取され死んだ人間が幾人もいる事実を告げられる。また、実際にKが助けを求めて駆け込んだ弁護士の家は、既に一三人の別の闖入者家族によって襲われていた。これらの挿話は、強者による弱者の労働力搾取が一個人の身に起きた悲劇ではなく、普遍的な事態であることを示している。そして、言うまでもなく、そうした事態は、虚構世界の中だけに限定されるものではない。マルクスが「資本主義的生産の不可欠の条件」（『資本論第1巻第2分冊』大内兵衛・細川嘉六監訳 大月書店 一九六八年）として労働力の搾取を捉えたように、資本が流

通する現実の世界であればどこにでも、容易に見出すことのできる光景なのである。

「闖入者」の物語を構成しているのは、以上のような暴力による占領支配と搾取のモチーフである。それらを体現する家族の形象は、個別の具体性を剥ぎ取られて「写実的リアリティよりも抽象的リアリティ」（石沢秀二「友達」前掲）を持ち、「なにかしらこわいもの」の侵略を恐怖のうちに予感することもできる「感覚的拡張」（同前）を備えている。ゆえに、特定の時代や場所に制限されることなく、読者が本作品を受け取る任意の時間と空間で、占領と搾取が実行される多様な現場を想起することが可能となるのである。「闖入者」は、国境を越える世界性を備えた小説であると同時に、読者が生きる時代に応じて読み解かれる可変的なリアリティを表出する作品であるのだ。

#### 四 グローバリゼーションと〈新〉植民地主義

闖入者家族とKとの関係は、力尽くで従属を強要する者とそれを受け入れざるを得ない者とが対峙する様々な場を喚起するアレゴリーとなっている。この寓意は、個々の読者がそれを読む時代と場所に対応する即物的な意味を生成するものであり、本作品を読む者にいかなる不正義が行使される現場で生きていくのかを問いかけるものでもある。

では、現在の日本において「闖入者」を読む時、そこにはど

のような状況が看取されるだろうか。本稿は、物語の基軸となっている占領支配と搾取の問題を、より複雑な関係の中で捉えることで、自らが生きる場を浮かび上がらせることができると考える。その手掛かりとして、作品には闖入者たちがKに対して自己犠牲を要請する場面が描かれている。家長の紳士からお茶を入れるよう命じられたKが、要求を拒否する次の場面がそれである。

「お茶なんてありませんよ。」とぶつきら棒に答えると、「ないとかあるとか聞いているんじゃない。いれてくれと要求しているんだ。そんな態度で共同生活が成立つと思つているのかね。」

「ないものは仕方がない。」  
「手に入れる努力をすればいいじゃないか。福音書にも言っている、善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべしとね。共同の福祉のために努力を惜しんじやいけないな。キリストはまたこうも言っている、与うるは受くるよりも幸いなりとね。さあ、行つて隣人にその幸いを授けて来たまえ。それとも君は、私たちにそれだけの信用がないという口実をもつて、私たちに侮辱を与える気かね。」

ここで紳士が神の言葉を敷衍してKに要請しているのは、



公益を維持するためには個別の利益を棚上げし、共同体のために進んで善き行いを実践せよということである。もちろん、それを論ず紳士は自分自身の利益を優先しているのであり、挺身するKには不平等な損失しかもたらされない。紳士の行為は、他ならぬ自らの口から吐き出された言葉を裏切っているわけである。

これが笑えないレトリックであるのは、紳士の口振りを真似る者が今、我々の目の前にいるからだ。日本政府は次のように述べている。

在日米軍施設・区域がその機能を十分に發揮するために、これを抱える地元の理解と協力が欠かせない。(中略) 沖縄は、米本土やハワイ、グアムなどに比べて東アジアの各地域と近い位置にある。また、南西諸島のほぼ中央にあることや、わが国のシーレーンにも近いなど、安全保障上きわめて重要な位置にある。こうした地理的特徴を有する沖縄に、高い機動力と即応性を有し、様々な緊急事態への対処を担当する米海兵隊をはじめとする米軍が駐留していることは、日米同盟の実効性をより確かなものにし、抑止力を高めるものであり、わが国の安全のみならずアジア太平洋地域の平和と安定に大きく寄与している。

(防衛省編『平成27年版 日本の防衛―防衛白書―』日経印刷 二〇一五年)

在日アメリカ軍は、二〇一四年三月三十一日現在、日本国内に八四箇所の専用施設を持ち、総面積三〇八二二七千平方メートルの土地を占拠している。<sup>8)</sup> また、在日米軍関係経費として、二〇一五年度予算では総額七二五〇億円が、我々の納めた税金から拠出されている。<sup>8)</sup> これだけを見れば、アメリカ軍は本作品が発表された時代と変わらず今もお、日本を占領支配し搾取する闖入者である。だが、アジア太平洋地域の平和と安定という公益のために、沖縄のような一部の地域へ過度の負担を強要し、理解・協力せよと要請しているのは日本政府である。それは、決して抑圧されるKの立場にあるわけではない。支配と搾取を代行する日本という国家は、アメリカ軍と同じ闖入者家族の一員であるはずだ。

このような支配・搾取される地域の内部において入れ子型に構造化される別様の支配と搾取は、マイケル・ヘクターの言う「国内植民地主義 Internal colonialism」(Michael Hechter. *INTERNAL COLONIALISM*. London: Routledge and Kegan Paul, 1975.) と捉えることができるだろう。ヘクターは、中核―周辺間の相互作用に起因する地域間の構造的な不平等が、海外植民地と同様国内においても周辺領域を社会構造の中で従属的な地位に押し込めると論じている。

西川長夫は、この「Internal colonialism」の認識枠組みを国民や民族の領域を越えたより普遍的な場に据えることで、現

在のグローバル化過程で進行している新たな植民地主義を理解することができると考えている（西川長夫『（新）植民地主義論』平凡社 二〇〇六年）。

西川によれば、資本や労働者、文化や情報といった様々な人や物が国家の枠組みを超えて地球規模で移動するグローバルゼーションは、世界を相互にネットワーク化し、資本を中心に向着て集積する回路を作り上げる。国境によって遮られることのない経済的・文化的な交換によって超国家的な秩序が形成され、国民国家の単位では状況を認識することができない新たな世界を出現させるのである。この世界を、国家の集合としてではなく、地球規模で実践される経済資本・文化資本の再生産システムとして理解する時、「Internal colonialism の internal はもはや「国内」ではなく「地球内」と訳さなければならぬ」（『（新）植民地主義論』前掲）と西川は述べている。国境という障壁が縮小し平面化した地球という連続する領域の内部全てが植民地主義の搾取対象となり、複雑に構造化される格差によって形成された差異を原動力として、資本は自己増殖を継続するのである。

こうした地球規模で実践される資本の再生産は、旧来の植民地の概念を大きく変化させる。グローバル化された世界における植民地主義は、ある国家が軍事力を行使して他国の領域を占領下に置き搾取を行うという形態を取らず、物理的な領域支配を必要としない「植民地なき植民地主義」（同前）として現象

すると西川は指摘する。なぜなら、労働者が容易に世界を移動できるようになった現在においては、労働力の担い手となる移民を資本が集積する中心領域に呼び寄せることは造作ないことであり、これまでの植民地のように固定化された領域を継続して維持管理することの方が困難であるからだ。グローバルゼーション時代の支配と搾取にとって重要なのは、過去の植民地主義のように労力をかけて特定の地域を領有することではなく、資本や労働力を周辺部から世界の中核へと効率的に移送することなのである。<sup>10)</sup>

こうしたグローバル化過程の植民地主義において諸個人が担わされているのは、世界の中心へと流れていく資本の中継地点としての役割である。資本そのものの支配者となれない以上、そこでは自らが他者を収奪し、そして自らも他者によって収奪されるといふ両義的なポジションを引き受けざるを得ない。これを本稿の文脈に即して言い直せば、グローバル時代を生きる一人一人が、「脅迫と飢えに疲れはてて」「自死に追い込まれるまで搾取されるKであり、「すべてを耐えうる愛の道に向つて逃出すの」と犠牲を堪え忍ぶよう強要しながら他者を支配する闖入者家族でもあるということだ。

グローバル化が進む現在の日本という場において「闖入者」を読む時、闖入者家族とKとの関係を、往時のように、国家間に惹起する占領支配―被占領支配、搾取―被搾取の単純な二項対立と捉える見方は成立し得ない。これまで考察してきたよ

うに、支配・搾取する者とされる者とは、相互に入り組みながら混在しているのであり、それぞれの立場が明確に分かたれていくわけではないのである。グローバルな領域内に生きる我々は、他者を略取する主体であり、略取される主体でもある。「闖入者」は、そうした現在に生きる自らの両義的な在り方を目の前に突きつけるのだ。

## 五 反転する日常／戦場

以上のように本稿は、「闖入者」に備わる抽象性を自らが生きる今この場所に引き寄せながら読み解くことで、グローバル化時代における支配と搾取の重層的な構造を浮き彫りにし、本作品が新たな植民地主義の様相を剔抉するものであることを明らかにしてきた。

現在を覆うグローバル化の波は、既存の世界システムを再編し、これまでの植民地主義の在り方を大きく転換させるものであった。だが、グローバルイノベーションによって変化させられたのは、植民地の構造だけではない。グローバル化の過程は、植民地主義の原罪とも言うべき「戦争」の意味をも変えたのである。

近代の戦争は、クラウゼヴィッツの古典的な定義によれば、「他の手段をもってする政治の継続」(『戦争論上巻』清水多吉訳 現代思潮社 一九六六年)であり、「敵をしてわれらの意志に屈服せしめることを目的とする暴力行為」(同前)である。主権国

家体制を確立した一六四八年のウェストファリア条約以降、この暴力行為を担ってきたのは相互に独立して対峙する国家であり、それらは互いに競い合って他国を搾取し続けてきた。

ところが、二〇〇一年九月一日にアメリカで起きた事件とその後の戦争が象徴的であるように、国家ではないものが戦争の主体を担う状況が現れてきたのである。ニューヨークの世界貿易センターに二機の旅客機を突入させることで宣戦布告もななく合州国を攻撃したのは、「国家を超えてネットワーク化された一種の暴力的なNGO」(ウルリッヒ・ベック『ナシヨナリズムの超克』島村賢一訳 N T T出版 二〇〇八年)であるテロリストたちであった。この時、国家と国家が闘うという従来の戦争の前提が崩れたのだ。国家のプレゼンスが低下するグローバル化した世界では、「すべての戦争は内戦となるか、あるいは超国家的な巨大な暴力に対する、内部からの非合法的な反撃となる」(西川長夫『戦争の世紀を越えて』平凡社 二〇〇二年)のである。

こうした戦争概念の変化を踏まえるならば、アパートの一室というドメスティックな空間内でKが給料を取り上げられた際、「激しい怒りの発作に襲われ、敢然と立つて挑戦」して暴力を行使しようとしたことは、テロリズムの、そしてグローバルイノベーション時代の戦争のメタファーとして読むことができるだろう。「闖入者」の舞台となっているアパートの部屋は、グローバル化する現在における戦場の空間であるのだ。闖入者家族の論理を非合法的な反撃によって崩そうとしたKの行動は彼ら

からの報復を招き、「次男坊の拳で右眼をいやというほど腫らされた」が、過剰な暴力で被抑圧者の異議申し立てを封じ込める闘入者たちの行動は正義を掲げテロ以上の法外な破壊と殺戮を世界の各地にもたらしながら「テロとの戦争」を遂行する強権の姿を髣髴とさせるものである。ここで、最終的に「脅迫と飢えに疲れて」死に迫いやられるKの姿を思い起せば、圧倒的な火力を行使する国家の暴力とテロの暴力とを区別する見方は無効となるはずだ。テロであろうと正義の戦争であろうと、暴力がもたらすのはいずれも個人の死であることに変わりはない。この小説に見出せるのは、剥き出しの身体を暴力の現場に晒さねばならない現在を生きる諸個人の姿であり、生活空間が突如として自らの生命を脅かす戦闘現場へと様変わりしてしまう不安定な日常の状況なのである。

アパートの一室で勃発する戦争は、日常の世界が不意に戦場へ反転することを示唆している。今、世界各地でテロが行われているように、日常生活を送る現在において、いっどこで非合法的な暴力による抵抗に遭遇するかは誰にも分からない。あるいは自らが実力行使によって抵抗しなければならない情況に追い込まれるかも知れない。グローバル化する世界において、戦争はもはや非日常の事態ではなく、海の向こうで始まるものでもない。Kと闘入者との闘いは、そうした理解が既に過去のものであることを示し、現在が常に既に戦時下であることを告げているのである。

## 注

(1) 本作品の初出は、安部公房「闘入者」『新潮』一九五一年一月

である。作品本文の引用は、校訂により誤記が修正された初刊本

(安部公房『闘入者』未来社 一九五二年)に拠った。本作品は、

一九五五年にラジオドラマ化されており、一九六三年にはテレビ

ドラマ化されている。また、「友達」と改題して戯曲化されてい

る(安部公房「友達」『文芸』一九六七年三月)。「友達」は、後

にシエル・オーケ・アンデション監督によって映画化されている。

映画版「友達」については、友田義行「地下墓状の原作」『文学』

二〇一四年一月)が原作との関係をも含めて詳細に論じている。

(2) 「闘入者」は早くから、GHQが敗戦後の日本にもたらした民主

主義の問題を中心に据えて読解されてきた。例えば、浅見淵他「小

説月評」『文学界』一九五一年二月)はデモクラシーへの諷刺

は見当違いであり、まず独裁政治や全体主義を批判しなければな

らないと苦言を呈し、関根弘「安部公房著『闘入者』」『近代文学』

一九五三年三月)はブルジョア・デモクラシーへの抵抗がアナ-

キズムに陥っており、プロレタリア革命へ至る組織的な闘争が描

かれていないと批判している。こうした戦後民主主義を巡る問題

はその後も作品解釈の基軸として敷衍され、小田切秀雄「鑑賞」

『日本短篇文学全集第48巻』筑摩書房 一九六九年)、野口武彦

「評伝的解説(安部公房)」『現代日本の文学47』学習研究社

一九七〇年)、田中喜一「友達」『国文学 解釈と鑑賞』一九七四

年三月)、宮西忠正「安部公房と三島由紀夫」、『三島由紀夫研究⑦』鼎書房 二〇〇九年)などがGHQ占領下の形骸化した民主主義の問題を描いた作品として「闖入者」を読んでいる。だが、それらはいずれも、「闖入者」の場合には、ごく単純に言えば、誤解された民主主義、もしくは多数という大義名分の機械的拡大解釈に対する、諷刺がそのテーマの中心におかれていたと言ってもいいだろう。作者としては、たとえば自由に対するアメリカ的神話、もしくは、保守政党の巧妙な多数原理の煙幕の利用、そして、奇しくもそれらとメダルの裏表のように一致している、左翼政党の偽似多数原理……そうした現代の皮肉な現象にホンロウされている、平凡な一市民を描き出すことに最大の目的があった」(安部公房「友達」『安部公房全集20』新潮社 一九九九年)という作者の言明の枠内に止まっていると言えるだろう。近年では、作者の意図とは異なる視点から本作品を読み直す研究成果が現れている。例えば、小松太一郎「安部公房「闖入者」」(『りりばーす』二〇〇三年一〇月)は、作品に描き出される家族の表象に注目することで近代の家族制度に備わる政治性への批評意識を浮上させながら、「都市をネガティブに語り出す視座を内破しよう」とまで試みた(同前)本作品の意義を明らかにしている。小松はまた、「対アメリカという視点にだけ固執してしまうことは危険でもある」(同前)とも述べており、限定的な視点に囚われることによって敗戦後における世界的なポストコロニアル状況に対する観点を見失ってしまうと指摘している。他にも、岩本知恵「「闖入者」

論」(『もぐら通信』二〇一三年一月)は、闖入者家族と主人公Kの論理に共約される同質性を明らかにし、双方が同じ民主主義の論理を内面化していると指摘した上で、「民主主義が闖入してきた」とは言えない(同前)と、これまでの先行研究の認識枠組みを根底から覆している。本稿は、こうした近年の研究成果から大きな示唆を得た。

(3) 「降伏後ニ於ケル米國ノ初期ノ対日方針」(外務省特別資料部編『日本占領及び管理重要文書集第1巻』外務省政務局特別資料課 一九四九年)を参照。

(4) この問題については、同時代に国民文学作品として評価された佐多稲子の小説「みどりの並木道」を具体例に挙げて論じたことがある。詳しくは、拙稿「佐多稲子「みどりの並木道」論」(『昭和文学研究』二〇〇七年三月)を参照された。

(5) Kōbō Abe, *“Vetřelci” červenyj kokon*, translated by Vlasta Winkelhöferová, Praha: Odeon, 1971.

(6) 元駐日ポーランド大使で安部作品のポーランド語への翻訳者でもあるヘンリック・リプシツ(Henryk Lipszyc)は、「闖入者」をリライトした戯曲「友達」が一九七〇年にポーランドで上演された際、舞台の演出家と話した時の会話を書き留めており、自らと演出家とともに、男の家に突然闖入してくる家族の表象にプラハの春を連想したと記している。ヘンリック・リプシツ「時代を先駆ける「友達」」(『へるめす』一九九三年一月)を参照。

(7) 朝雲新聞社出版業務部編『平成27年版 防衛ハンドブック』朝雲

新聞社 二〇一五年を参照。

(8) 外務省編『外交青書2015(平成27年版)』日経印刷

二〇一五年を参照。このうち、いわゆる『思いやり予算』と呼ばれる在日米軍駐留経費負担の総額は一八九億円となっている。

(9) ネグリ／ハートも、グローバルゼーションがもたらした重大な帰結として労働者の移動性を挙げ、「資本のグローバルな規律的パラダイムによって導入されたこの新たな移動性から、いくつかの重大なマクロ経済的效果が生じる。さまざまな人口が発揮する移動性のおかげで、国内市場(とりわけ、国内労働市場)を個別に管理運営することはますます困難になっていく。資本主義的指令を適用するのにふさわしい領域は、もはや国境ないしは伝統的な国際的境界によってその範囲を定められたものではない」(アントニオ・ネグリ／マイケル・ハート『『帝国』』水嶋一憲他訳 以文社 二〇〇三年)と述べている。

(10) ヨハン・ガルトゥングは、「新植民地主義という現在の帝国主義の段階では、支配は過去にみられたような直接的で具体的な形をとらない。ここでの支配は、二つの中心部を相互に結びつける輸送(そしてもちろんコミュニケーション)手段を介して行なわれる。このような支配は、以前のものほど具体的ではない。それは、物理的支配を必要とせず、結合をとおして行なわれる。そしてこの結合は国際組織という形をとる」(『構造的暴力と平和』高柳先男他訳 中央大学出版部 一九九一年)と述べ、そうした支配の担い手として多国籍企業や国連、軍事同盟などの国際組織の存在

を挙げている。

【附記】本文や資料の引用に際し、漢字は新字に改め、ルビ・傍点等は全て省略した。また、引用・参考資料名の副題は省略した。